

演目の解説

げんじょうらく

舞楽「還城楽」

げんじょうらく

別名「見蛇楽」ともいいます。蛇を好んで食べる西国の人^{ずるて}が蛇を見つけ、これを捕らえて喜ぶ姿を舞にしたともいわれています。打楽器の軽快なリズムに乗って出手（舞台への登場の仕方）を舞い、中ほどで蛇を見つけて、あたかも蛇を打つような手振りも見られます。活発な舞で、半ばごろから佳境に入り、右方の走舞としてはこの舞の右に出る曲はないほどです。

原笙会では一手も変えることなく、初の試みである童舞四人舞に組み換えてみました。一人舞では見られない、万華鏡を見るような美しさがあります。

かりょうびん

舞楽「迦陵頻」

「鶯のうららかなる音に 鳥の楽はなやかに聞きわたされて 池の水鳥もそこはかとなくさえずりわたるに 急になり果つるほど飽かずおもしろし」と、『源氏物語』の胡蝶の巻には迦陵頻が描写されています。

極楽に棲むという想像上の鳥、迦陵頻は僧 仏哲が天王寺に伝えたといわれる林邑八楽の一つ。仏教の盛んであった、物語の時代背景を象徴する舞楽です。

鳥の文様と「か」の紋を施した一巾の袍^{ひとば ほう}、一巾の指貫袴^{さしぬきはかま}に鳥足を表した脚絆^{きゃはん}をつけ、背には鳥の造り羽を背負い、銅拍子を打ち鳴らして舞います。

舞楽「平安の舞」

そくいれい

ごせちのまい

十二単の舞は、即位礼で舞われる「五節舞」が有名です。「五節舞」は儀礼舞として重厚な舞ですが、原笙会の創始者である原祥子は東儀秀樹氏が作曲した「真珠庵」を聞き、この伴奏で舞を作りたいと思い立ちました。ご諒解を得て五節舞の手振りも取り入れながら、平成の十二単舞を創りました。

十二単という装束の動きの制約を受けながらも、シンセサイザーと雅楽器が織りなす新しい音楽の伴奏で軽やかに舞います。

しらびょうし

「白拍子」

舞楽ではありませんが『平家物語』に登場する祇王と祇女、仏御前が舞ったとして、人気の高い風俗舞です。

頭には高烏帽子^{たかえぼし}、緋の長袴に白の水干^{すいかん}。太刀を吊り扇をかざして舞う姿は、平安時代に女性が男装をした初めです。

↓ 白拍子

